

# 部分解の継時的な閾下呈示が洞察問題解決に与える影響

鈴木 宏昭<sup>1,3</sup>, 福田 玄明<sup>2,3</sup>,  
 1 青山学院大学, 2 東京大学, 3 青山学院大学ヒューマンイノベーション研究センター

## 洞察における意識と無意識

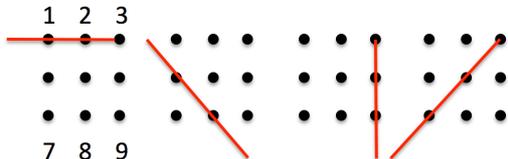
- 意識と無意識の乖離: Metcalfe (1986), Siegler (2000), Terai & Miwa (2003)
- 言語隠蔽効果: Schooler, Ohlsson & Brooks (1993)
- 意識的処理とは独立に解決メカニズムが働く可能性を示唆している。

## 閾下呈示による促進:

- 西村・鈴木 (2006): マスキングを用いたゴール画像の閾下呈示
- Hattori, Sloman, & Orita (2012): マスキングを用いたヒント画像の閾下呈示
- 鈴木・福田 (2013): 連続フラッシュ抑制(CFS)を用いたゴール画像の閾下呈示

## 本研究の目的

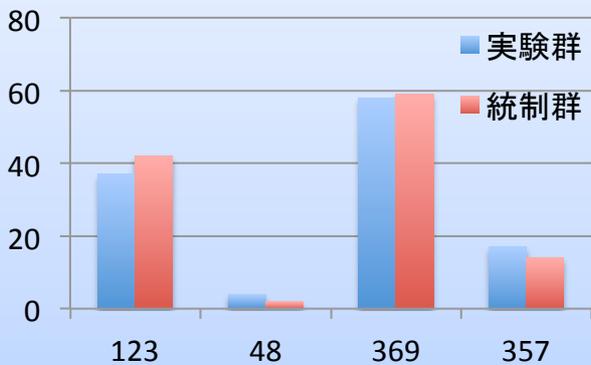
1. 閾下呈示された情報の所在と機能を明らかにしたい。
2. 継時呈示された部分情報の統合の可能性と呈示順序の効果を検討したい。



## 手続き



## 結果と考察



横軸は用いた線の種類、縦軸は利用比率。

- 15分以内に解決できた参加者の比率は実験群、統制群に変わりはない (33.3% vs. 37.5%)。試行数(用いた用紙数)も同様。
- 枠外への線の延長の比率は、実験群 24.4%, 統制群 7.3%であった ( $\chi^2 = 22.24, df = 1, p < .001$ )。
- 呈示した直線に対する選好にもほとんど差がない。ただし未解決者の対角線(357)の利用には差が見られる (34% vs. 18%)。
- 個人差の統制、継時呈示の効果と統合の可能性を分離して検討する必要がある。